

現代中国における家庭環境と学歴取得意識の形成に関する実証的研究 —大連市での質問紙調査に基づいて—

東京大学大学院 許 敏

I 問題設定

A 研究目的

現代中国では、家庭教育は急速に変化している。その原因として、二つ考えられる。一つは、文化大革命終息の1979年から実施された「一人っ子政策」でありもう一つは「改革・開放政策」の実施により、激しく変動する社会環境の影響である。特に「一人っ子政策」は世界的に人々の関心を集め、一人っ子の家庭教育が孕んでいる過保護、知育偏重、過剰期待などのような問題点もいろいろ指摘されてきた。しかし今までの研究は、もっぱら「一人っ子」の家庭教育に存在している弊害を指摘することに重点が置かれたが、子どもを取り巻く社会環境や、家庭環境の変化との関連で、家庭教育のあり方を捉える視点が抜け落ちていた。

中国では、1978年から実施されてきた「改革・開放政策」により、産業構造をはじめ、社会構造、人々の生活様式・価値観、家庭環境、社会生活全般に激しい変動が起きている。このような中国社会の変動と、それに伴う家庭環境の変容は、家庭教育のあり方に大きな影響を及ぼしている。本報告は、こうした大きな変貌を遂げつつある中国社会において、家庭教育の一側面である学歴取得意識と家庭環境との関連を明らかにすることを目的としている。

なぜ、学歴取得意識に注目するのか、その原因は以下のようなものである。まず、中国は社会主義国であるため、平等主義の旗が揚げられてきたが、実際には都市と農村、高学歴者と低学歴者、ホワイトカラーとブルーカラーとの間に大きな格差が存在している。李洵氏の研究によると、中国の高等教育機関が、都市出身者、高学歴者、ホワイトカラーのような社会最上位の階層によって多く占められていることは明らかにされた。現在、中国の高等教育はまだエリート段階にあり、就学率が同一年齢人口の4%しかなく、さらに高校の入学率も同年齢人口の20%だけであるため、この大学入学をめぐる階層間格差はすでに、高校以前の中学校段階、さらに学校教育の初期段階である小学校段階にすでに存在していると考えられる。この点について、日本でも80年代の初め頃に、子どもがすでに小学校段階から成績によって将来展望が閉ざされていたことは報告された。また、もし本当に小学校段階ではすでに将来の教育達成への展望意識が分化されているならば、この異なる学歴

取得意識は家庭教育の全般に影響を与えていると考えられる。この二つの点から、義務教育段階、特に小学校段階における親子の学歴取得意識の形成と家庭環境との関連を解明することは重要であると思われる。

B 研究方法

本報告は、筆者が1996年4月から5月にかけて、中国の沿海対外開放都市の一つである大連市で、主に小学生5、6年生及びその両親を対象として行われた質問紙調査の分析結果をまとめたものである。分析にあたって使用する家庭環境要因を、親の学歴・職業、家庭の収入を指標とする家庭の社会的・経済的環境要因と、家庭の教養的所持品の所有状況、蔵書量を指標とする家庭の文化的環境との二つの側面から捉えるほかに、親の戸籍、つまり地域要因が重要な変数として使用することになる。

II 家庭環境について

中国では、1958年に中央政府は「戸籍制度」を導入したことによって、都市と農村との間に、収入や社会保障、社会福祉、教育機会などの制度に関わる側面で深刻な格差が存在している。しかし中国の社会は1978年の「三中全会」において改革開放路線が取られ、大きな変動に見舞われた。従来の社会階層が再編成され、親の学歴、職業、所得の間の社会地位の非一貫性は顕著になっている。特に農村では、従来の農耕社会における就業構造が変化し、農業生産にとどまる人の割合がかなり低くなり、ブルーカラー、ホワイトカラーに上昇した人は増えている。このような家庭の社会的・経済的背景の変化と、家庭の文化的環境との関連をみると、次のようなことが確認された。全体的に親の学歴は職業との間に高い相関が見られるが、家庭収入との相関が低い。家庭の文化的環境は、親の学歴、職業との相関がやや高く、家庭収入との相関がそれほど高くない。また、地域と家庭環境の間には、親の学歴、職業との相関係数が比較的高いが、家庭文化的環境との相関が低くなっている。もう一方では、家庭収入との関連がほとんど認められない。このことから、これから親の学歴、職業指標を用いて分析を行なう際に、地域要因を考慮すべきことを示唆している。

Ⅲ 子どもの学業成績に影響する家庭環境要因

従来教育社会学領域では、家庭の社会階層が子どもの学業成績との間に何らかの関連性があることが指摘されてきた。しかも家庭の社会的階層と学業成績の二変数間の相関関係を明らかにしただけではなく、この二つの変数の間にどのような媒介変数が存在して、これらの媒介変数がいかなる因果関係を形成しているかも、ある程度明らかにされた。

それでは中国では、子どもの学業成績は家庭環境によって影響されているのか、次では分析する。なお、分析では使っている学業成績は「よくない」「普通」「よい」と3段階で子どもに自己評価させたものである。この学業成績は、子どものクラス或いは同一学年では成績の相対的位置を表すものであるため、家庭環境との関連を学校毎に分析することにする。

分析結果をまとめると、次のようになる。農村地域にある小学校において学業成績と家庭環境要因との間にすべて有意な相関が認められない。都市の雑居地にある普通小学校の場合、子どもの学業成績は、親の学歴、職業、家庭収入との間に有意な相関が見出せなかったが、家庭の文化的環境要因との間に比較的高い相関が見られる。さらに都市にある社会的評価が高い小学校の場合では、家庭収入以外の、親の学歴、職業、家庭の文化的環境との間に有意な相関が認められた。

分析結果より分かるように、ランクの高い学校では、小学校段階にあるにもかかわらず、家庭の階層要因がすでに子どもの学業成績に影響を及ぼしている。また、都市部における普通小学校を合わせてみると、子どもの学業成績にもっとも影響力を持っているのは、家庭の文化的環境要因である。

Ⅳ 親の期待学歴

それでは、家庭環境要因は親の子どもに対する期待学歴に影響を与えているか、ここでは検討してみる。また、今までの教育社会学では蓄積されている学歴のアスピレーションに関する研究結果によると、家庭環境要因及び学校、学業成績要因の影響力が指摘されている。ここでも、同様に説明変数として出身階層、家庭の文化的環境要因を使用する以外に、学校ランク、子どもの学業成績要因も加えて考察を行なう。

まず、全体的に親の期待学歴水準を確認すると、親の期待学歴は極めて高いことが分かった。しかし親の期待学歴が驚くほど高いにも関わらず、二重クロス表に基づいて親の期待学歴と家庭環境要因、学校ランク、子どもの学業成績との関連を検討してみると、各要因との間に統計的に有

意な相関が見出せることが確認された。しかし学校ランク要因をコントロールして、家庭の階層要因、文化的環境要因、学業成績要因の親の期待学歴の形成に与える影響を検討してみると、階層要因の影響がほとんどなくなり、もう一方では文化的環境要因、学業成績要因の影響は学校ランクが高くなるにつれて小さくなったことが確認された。しかし学校ランクの影響力はまだ強く残っている。

また、農村と都市との地域間に歴然とした親の期待学歴の格差が存在している。農村部において親の期待学歴は家庭の文化的要因以外には、家庭環境要因との間にほとんど統計的に有意差が見出せなかった。つまり農村では親の期待学歴は基本的に子どもの学業成績に影響され、形成していると考えられる。これに対して、都市においては、親の期待学歴は主として家庭の文化的環境、学校ランク、子どもの学業成績によって影響されている。

Ⅴ 子どもの希望学歴

まず子どもの希望学歴の基本状況を見ると、親のそれと同じく高いことが確認された。また子どもの希望学歴と前述の諸要因との関連を見てみると、家庭収入要因の以外の要因とは全部有意な相関が見られる。しかし学校要因を考慮して考えると、家庭環境要因の影響がほとんど消えてしまった。さらに、学校ランク間の差を比較すると、同じ都市部におけるランクBとCの学校間の格差がとても小さくて、これに対して両者と農村部にあるランクAとの格差が著しくなった。また子どもの希望学歴は親の期待学歴との間に比較的高い相関が認められる。

Ⅵ まとめ

以上の分析結果から分かるように、現在中国では、家庭における親子の学歴取得意識は、小学校段階ではまだ漠然的、理想的であるにもかかわらず、すでに分化されている。家庭の社会的出自要因は直接的に学歴取得意識の形成に影響を及ぼしていないが、家庭の文化的環境、学校ランク、学業成績などの媒介要因を通して間接的に影響している。しかし家庭の経済的要因がまったく影響力を持っていない。このことは今までの中国高等教育がほとんど授業料を徴収せずに行われてきたと関連があると考えられる。また、農村と都市との地域別に見てみると、農村部では一部の農民が農業から離れ、ブルーカラー、ホワイトカラーに上昇したにもかかわらず、学歴取得意識の形成に変化を持たずに、学歴アスピレーションは農村社会という枠に閉ざされていることが分かった。